

「十字架につけられる」

2014年12月06日

マルコによる福音書 15章 26節～32節。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

主イエスは、ゴルゴタの刑場で午前9時に十字架につけられた。十字架刑は人間が考えた刑罰の中で、最も苦しい刑と言われている。木に釘付けし、息が切れるまで放置するので、何日も苦しみ抜く。体が落ちて息ができなくなるので、体を押し上げる。押し上げる力を失い、最後に窒息死する。十字架刑はカルタゴで初めて行われたと言われているが、ローマ帝国が取り入れた。しかし、あまりに苦しい刑なので、ローマ人以外、ローマ帝国に反逆した者だけに適用された。

刑場のゴルゴタは「されこうべの場所」という意味で、エルサレムの町の外にあった。形がされこうべのような丸い形をしていたという説がある。また、十字架で殺された人々は埋葬されず、この場に放置される。すると、野犬や野鳥が肉を食い干切り、ついばむ。白骨になったされこうべが点在していた。それで「されこうべの場所」と言われたという説がある。いずれにしても、殺風景で恐ろしい所であったことは確かであろう。

十字架は正しくはT字型で、両手を広げ、手のひらを釘づけされる、股の所に重心を支える突っかい棒がある。足も釘づけされた。血の滴り落ちる残酷な刑である。T字の上に罪状書きがつけられた。主イエスの場合、当然「ユダヤ人の王」であった。主イエスの左と右に、同時に十字架につけられた強盗がいた。彼らは単なる強盗ではなく、ローマへの反逆者であった。植民地支配に対し、反抗する者たちがいたということである。

主イエスの十字架刑に群がった人々は、頭を振りながら、口々に「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ」と罵った。エルサレム神殿の最高権力者、祭司長や律法学者たちも群衆と一緒に代わる代わる侮辱の言葉を投げかけた。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう」という言葉であった。彼らの「他人は救ったのに、自分は救えない」という悪口に、主イエスの生涯が表されている。「ガリラヤの春」と言われる宣教において、他者のために働き、「枕する所もない」多忙の中で、自分を与え尽くす愛を生きられた。自分のためには何も求めず、まさに、他人を救い、自分自身を救わなかった。その最期に、十字架から降りることなく、ご自分を献げて、罪の赦しという福音を実現しようとしておられる。

人は力ある華々しい勝利に救いがあると錯覚する。しかし、神は敗北に見える主イエスの苦難と死に救いがあると啓示された。この逆説に「アーメン」と唱和することがキリスト教信仰である。主イエスの十字架に神は共にいてくださる「インマヌエル」の事実があり、それは、人間の生に対し神による「絶対的是認」という救いである。